

高校多様化問題と体育・スポーツ

(202号 1992.12)

「臨教審」の個性化路線の具体化として、ここ1、2年の間に、大阪府下の高校にさまざまな、新設学科・コースが登場してきている。

多様化のねらい

種別		学科・コース
府立校	普通科	・国際教養科 ・体育科
市立高	普通科	・体育科 ・武道科 ・理数科 ・人文科 ・英語科
	商業科	・情報システム科 ・情報会計科 ・情報処理コース ・経営実務コース
	工業科	・理数工学科

証言 1

「特色化」とは、「普通化制限」の別言に他ならない。これにより、当然、職業系・非進学系の特色科は学校不適応が顕著化する。つまるところ、特色化とは、公立高校の専門化と予備校化であり、過度に一般普通教育を軽視する中等教育であるといえる。入試制度（「一時入試」「傾斜配点」の導入）を含む特色化路線は、子どもが減っても厳しい競争を維持する方法として考案されている。入試の多様化は、競争形態の多様化であり、多段階に選別を精密化することに目的がある。

証言 2

新学習指導要領には、能力主義が一層貫かれている。低学年から始まる「詰め込み」で子どもたちは小学校の早いうちから、選り分けられ、今度は中学校の選択教科の拡大と習熟度別学習で、「個に応じたコース」に振り分けられ、さらに多様化・細分化された高校に送り込まれる。ここに体系的な「選別と差別の構造」を読み取ることができる。選択教科が差別・選別につながるのは、中学校で共通に学ぶべき場を減らして、「いやなことはやらなくて良い」として、これを高校多様化につなげ、発達の可能性を切り捨てるからである。

中学校では

進路指導に関して言えば、中学3年生の段階では子ども自身に、多様な学科を選択する力はない。指導する教師の側にも、高校の特色ある学科・コースの情報はパンフレット程度である。だから子どもの個性に応じた進路指導は無理であり、子どもの希望と成績によって振り分けるしかない。教師としては、入口（入学）よりも出口（高卒後）の進路のことを心配する。出口を考えれば、新しく多様化された公立よりも私立の方が安心である。

体育・スポーツとの関わり

ある「体育科」の入試では、内申書と学力テストに加えて実技テストを課している。その内容は運動能力テストと自分の得意種目である。これを見れば、体育科で要求される子どもは、運動能力と各種目の技術の高い子ということになる。つまりトッププレイヤーを育てたいということである。